



八月二三日、「遊々の森」活動の一環として、飯山北地区コミュニティ推進協議会主催による「遊々の森ネ



森林教室の様子

イチャークラフト」が開催され、当所から二名の職員が講師として参加しました。

の過程などを学んだ後、ネイチャークラフトを行いました。

当日は、四国最大の野外フェス「モンスターバツシュニ〇一五」が近隣で開催されていたこともあり、参加人数に若干の不安もありましたが、子供二五名、保護者一二名の参加のほか、地元スタッフを含め五〇名にもなる盛況ぶりでした。



オリジナル巣箱の完成

初めに、国有林のPRを兼ねてパネルを使用した森林教室を行い、国有林の仕事や木材が利用されるまで

トでは、高学年を中心に鳥の巣箱づくり、低学年は小枝等を利用した木工品づくりを行いました。設計図をもとに準備された部材をいとも簡単に加工する児童もいれば、使いなれない工具に四苦八苦する姿もありましたが、午前中の短い時間の中で保護者やスタッフの手を借りながら、全員が怪我もなく無事に完成させることができました。

子どもたちは、巣箱にカラフルな絵を描いたり、巣箱と小枝クラフトとのコラボを作ったりと、常識にとらわれない豊かな発想には甚だ感心させられました。中には、子供よりも熱心な保護者の方もいて、子供の作品にアレンジを加えたり

率先して工具を手にとったりと、親子が協力しあった良い作品もできあがり、みんな自分の作品を眺めては満面の笑みを浮かべて大満足の一日となったようです。



森林教室（森の話）



山市、愛媛県、松山河川国
道事務所、当署の主催のも
と、松山市玉谷町の石手川
ダムせせらぎ公園におい
て、小学生の親子一〇〇名
を対象に開催されました。

を含む主催者代表の挨拶
の後、東雲女子大学の石川
名誉教授と愛媛大学の酒井
教授による昆虫観察が行わ
れ、公園の周辺にいる昆虫
や水中生物の数々に子供た

ては、国有林等の森林の役
割について説明を行いました。
普段聞けない話とあつ
てか子供たちの真剣に聞き
入る様子が印象的でした。
また、木工教室について

午前中は当署の川畑署長

ちは興味津々の様子でし

は、愛媛県産のスギの間伐

た。中には先生が昆
虫の名前を紹介しよ
うとする前に名前を
言い当てる物知りな
子供もおり、汗をぬ
ぐいながら熱心に観
察していました。

材（地域材）を利用したコ
マと写真立ての作製に取り
組みました。子供たちは「コ
マが長い時間、回るように
するためには、部材のどこ
を削ればいいのか」等を一
生懸命考えながらコマ作り

午後からは当署が

に取り組んでいました。

後は松山市東消防署による

担当する森林の話と

その後のコマ回し競争で

水難救助に関する話と、親

木工教室を行いました

は、五人一組となって熱い

子いっしょに川遊びを行い

た。森林の話について

闘いが繰り広げられ、勝利

しました。今年も怪我がなく、



森林教室（コマ回し競技）

無事にイベントを終えるこ
とができ、最後に推進委員
会からカブトムシやクワガ
タムシがプレゼントされ、
子供たちは大喜びでした。

今回のイベントを機会に、
国有林等の森林に対し興味
や関心を持ってくれる方が
一人でも多くなることを切
に願っています。



このほど、高知県四万十

町の窪川警察署より「近

年、中高年の登山ブームも

あり、国有林内の松葉川山

や森ケ内山、地藏山など遭 受け、七月三〇日、鈴ヶ森 し、新聞記者一名が同行し き、通信ポイントでは衛星

難事故や滑落事故が発生し (標高一、〇五四m) 山系 ました。

電話・携帯電話・警察無線

ている。(平成二二年から において、当署と警察署に 当日は松葉川温泉に早

の各種通信状況の確認、迷

四件の遭難・滑落事故が発 による合同山岳訓練を行いま 朝集合、結団式を行った

いやすい分岐点の確認、下

生) 今後も同様の事案の発 した。

後、四万十町と梶原町の境 山ルートの確認を行いまし

生が予想されることから、 訓練を行った鈴ヶ森山系 界にある春分峠より鈴ヶ森

た。また途中二つのルート

警察としても国有林におけ は、松葉川温泉の北側に を経由して、宮の谷登山口

から当署職員が合流し、地

る登山道、山の状況等につ あり、標高一、〇〇〇m前 までの総延長一二kmに及ぶ

理を把握しながら遭難事故

いて把握し、遭難事故が発 後の尾根道に沿って広葉樹 尾根道を踏破しました。尾

に備えてどういった体勢が

生した場合の対応を検討し の保護樹帯が連なることか 根道は樹林の中でもあり下

とれるのか、どういう搜索

ておきたい。」との依頼を ら、近年、山歩き登山客 界と比べわずかに涼しいと

をすると迅速に、確実に救

が増加して はいえ、梅雨明けの最も暑 助できるのか検討しまし

た。

いるエリア います。合同 訓練には当 変ハードな行程となりまし

は、「森林管理署との連携

署から五名、 警察署から 道中、道迷い防止のため

練ができた。もしもの事態

五名が参加 にピンクテープで目印を巻

に備えてこの訓練を役立て



歩行中、アカガシの巨木に出会う

歩行訓練中



ていきたい。」との話があ りました。

今後もこのような合同訓 練により当署と警察署が連 携して登山者の安全確保を 図る取り組みを継続して行 きたいと思えます。



九月九日～一〇日、今

後、主伐を進めるにあたってどのような施業が良いのか、伐区をどのように設定したら良いのかなどについて、現場の森林官や署の森



室内での検討会

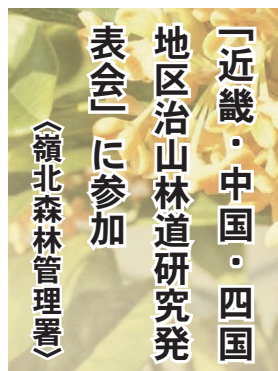
林整備官が「山を見る」視点を養う検討会を開催しました。考えたグループ、林道や作業道の状況から搬出方法を考えたグループなど様々な視点で検討を行い、その結果を発表しました。当署は、これから新しい計画策定の時期を迎えることから、間伐や主伐などの森林施業の検討を行うにあたって、森林調査簿、空中写真、図面、現地調査を活用して行う必要があり、どういった手順で、どのように行うのか署内である程度統一しておいた方が良いでしょう。考えて今回の検討を実施したものです。

検討会は、参加者を四つのグループに分け、主伐を予定している箇所について、初日は森林調査簿と図面を活用してどんな森林整備を行うか、伐区をどのように設定するかについて署内で検討を行い、二日目は現地において検討した内容が妥当かどうかを確認しました。初日の検討では、署内各グループとも活発な意見交換を行い、森林調査簿から林分状況に着目して伐区を考えたグループ、林道や作業道の状況から搬出方法を考えたグループなど様々な視点で検討を行い、その結果を発表しました。二日目の現地検討では、検討した内容が現地に適応しているのかどうか、林分状況、地形状況などを勘案して改めて検討を行いました。その結果、「部分的に広葉樹が混生しているので分散伐区とし、将来は針広混交林にできないか」「調査簿の数値より現地の方が悪いので、一度保育間伐(活用型)を実施した後、誘導伐を実施したほうが良い」

と発表しました。今回の検討会での成果をもとにそれぞれの現場に応じた適切な森林施業が実施できるようにして行きたいと考えています。



現地検討会



八月二十八日、徳島市のあ

わぎんホール(徳島県郷土文化会館)において第五一回近畿・中国・四国地区治山林道研究発表会(今年度

嶺北署の研究発表の様子



主催・徳島県）が開催され、治山部門一・二課題、林道部門五課題、計一七課題が各県の担当者等から発表されました。

当署からは「早明浦地区 民有林直轄地すべり防止事業概成に伴う取組と成果に

ついて」との課題で治山グループの松本・宮脇両氏が四国森林管理局代表として参加しました。

昭和五〇年、五一年の台風による崩壊多発と地すべり活動の活発化をきっかけに昭和五五年に早明浦治山事業所が開設し、平成二五年までの三五年間に総事業費八六億円を投じ、各地区において地すべり対策工を施工し地すべり活動を沈静化させたこと、溪間工・山腹工を効果的に配置し、下流域への土砂流出防止及び

て発表しました。

今後とも、地域の安全安心のため、また、治山事業に対する多様なニーズに对应していくため、技術開発等への取組や治山事業等のPRに努めていきたいと考えています。

荒廃地の安定化を図り、事業概成に至った経緯について

取扱いに関する考察」と題して、魚梁瀬・西川森林事



発表のテーマとして、「ヤナセ天然スギ択伐施業モデル林の現況と今後の施業の取扱いに関する考察」と題して、魚梁瀬・西川森林事

務所有働係員と大井森林事務所永石森林官により、発表に向けて取り組んでおり、八月二一日に当署会議室において、関係職員が参加して中間発表会を行いました。

ヤナセ天然スギについては、本年三月、四国森林管理局主催による有識者の検討委員会での議論を経て、「希少なヤナセ天然スギ資源の維持・保全のため、継続的、計画的な伐採・供給は平成三〇年度から休止する」との方針が決定され、公表されました。

ギを巡る状況の中、本研究発表で取り上げる和田山ヤナセ天然スギ択伐施業モデル林（面積約八四ha）は、昭和一〇年に択伐試験地に設定され、次のような施業履歴を経過し、現在に至っています。

① 昭和元年～二年に、魚梁瀬地区の施業案を改定し、択伐の目標林型を定め、第一回目

② 第二回目の択伐を昭和四三年～五八年に実施するとともに、地拵による

実施

署での中間発表の様子



天然更新やヤナセスギの
植込みを実施

③ 平成一〇年〜一一年に
一部小班で択伐を実施

本モデル林は、当初は、
本数でツガ、モミが六割を
占める一方、スギが四割弱
の老齡過熟林でしたが、ス

ギ主体の択伐林型に導くた
め、ツガ、モミ、広葉樹を

選択的に択伐し、下層にス
ギを植栽してきた結果、現

在は、スギの本数割合が八
割以上となり、胸高直径階
別本数も目指していた択伐
の目標林型に近づいていま
す。

分状況を把握するととも
に、

② 同じく魚梁瀬地区の大
戸山で平成二四年に伐採

されたヤナセ天然スギに
ついて、森林総合研究所
四国支所酒井敦氏から提
供いただいた年輪解析に
基づく、胸高直径の肥大
成長量、材積成長率を照
らし合わせ、

本モデル林は、昭和初期
から現在までの約九〇年間

にわたり、諸先輩方が長期
的なビジョンの下、択伐目

業に取り組んできた成果と
言えます。私たちも、本モ
デル林において、永続的に
択伐実施を実施していける
よう、将来世代に残せる資

ができるモデルとして期待
できる」などのエールや、

「もつと写真等を使ったほ
うがわかりやすい」「林業

に詳しくない人にもわかり
やすい説明をしたほうがよ
い」など発表に関するアド
バイスや、今後の植生調査
についてのアドバイスをい
ただきました。

本研究発表では、第二回
目の択伐から四〇数年が経
過する現在、

③ さらに、現在実施して
いる下層植生も含めた植

料とすべく、森林総合研究
所四国支所等の関係機関か

① 平成二五年に調査した

生調査（プロット調査）

らも参加をいただきなが

本モデル林におけるヤナ
セ天然スギの胸高直径毎

の結果を踏まえ、今後の
施業の取扱いについて考

ら、本課題に取り組んでい
きたいと考えています。

本データと択伐目標林型
の胸高直径階別本数を比

較することとしていま

は、「択伐施業により複層
林を維持し、永続的に収穫

較すること、現在の林

す。

林を維持し、永続的に収穫

